

コラム8

ウェントの世界国家論と「感情の政治」

安高啓朗

Wendt, Alexander 2003 "Why a World State Is Inevitable," *European Journal of International Relations*, Vol. 9, No. 4, pp. 491-542.

アレクサンダー・ウェントという人は良くも悪くも論争的な議論を展開する。その主著『国際政治の社会理論』はアメリカ国際関係学会 (ISA) によって1990年代における最も優れた著作に選ばれるなど、現代の学問としての国際関係に大きな影響を与えてきた (Wendt 1999)。本書評では、『社会理論』の第2部で扱われたいくつかの考え方 (国家と主体性、構造としての「アナーキーの文化」、構造的変化) をさらに掘り下げた2003年の論文「なぜ世界国家は不可避なのか」の主要な論点を取り上げるとともに、超国家権力が内包する脆弱性を考える際の意義について論じてみたい。

『社会理論』では、システムの歴史的進歩、たとえばホブスのアナーキーの文化からカント的なそれへの移行については、暗黙の前提となっていたものの、必ずしも明示化されていなかった (Sárvary 2006)。その点、2003年論文は目的論的説明というアリストテレス以来のオルタナティブな説明の水脈を引き込みながら、システムが安定的な最終状態 (end-state) に向けて発展する傾向をやや挑戦的に、正当な組織的暴力のグローバルな独占としての世界国家が不可避であると論じる。

それでは、なぜ世界国家は不可避なのか。ウェントはまず、目的論的説明からはじめる。ウェントによれば、目的論的説明とは「最終目標ないしは目的に向けたシステムの方向づけを参照する説明の仕方」である (Wendt 2003, p. 496)。たとえば、Yを実現するためにXが起こるとすると、YはXの「目的因 (final cause)」となる。このような目的論に関心が集まる理由について、ウェントは実証主義者の説明では自然がもつあたかも最終目標に向けて進んでいくような志向性について説明できないからだという。

目的論的説明に基づいた世界国家形成の理論は、マイクロ／ボトム・アップのプロセスとマクロ／トップ・ダウンのプロセスの組み合わせとして提示される。まず、マイクロレベルでは自己組織化に関する理論が参照される。これは秩序がどのように、純粹にローカルな規則に従った構成要素の相互作用の結果として生じるかを明らかにする。アダム・スミスの見えざる手のように、システムの秩序が下から、あるいは「上向きの因果性 (upward causation)」によって自己調整的に生成されるのである。つぎに、マクロレベルでは、方法論的全体主義の観点からシステムをその外部環境と区別し、内側のプロセスに一定の閉鎖性を課す「境界条件 (boundary conditions)」についてみる。境界条件はDNAのように生物に関する場合や、アナーキーの文化のように社会的な場合があるという。ここでは、どのように境界条件が個の相互作用を制約し、統制するか (「下向きの因果性 (downward causation)」) が検討される。たとえば、ウォルツがどのようにアナーキーが勢力均衡を引き起こすかを論じるときには、このタイプのアプローチが取られているのである。

このような目的論的説明を踏まえて、ウェントは全体と個における個の部分、すなわち国家について考察する。ウェントによれば、国際政治の主体は究極的には個人だが、世界全体 (システム) と相互作用する場合はなんらかの集団を通して関わることがほとんどであり、歴史的には部族や都市国家、帝国、都市同盟など多様な形態が存在していたものの今日では領域国家 (territorial state) に収斂していることから、国家に焦点を絞ることが妥当であると述べる (Wendt 2003, p. 504)。この国家の特徴について、ウェントはウェーバーの定義に依拠しながら4つの側面 (暴力の独占、正統性、主権、集団としての主体性 (corporate actor)) を挙げる。ここから、世界国家にとって必要な要素として、共通権力 (common power)、正統性、主権、主体性 (agency) が導き出される。なお、ウェントによれば、「完全な」EUがグローバル化すれば世界国家となるという。

もっとも、このことは世界国家が今日における

国家と同じであることを意味しない。ウェントは世界国家が現在の形態とは異なる可能性として、①ローカルな自律性を構成要素から取り上げることを必要としない、②単一の国連軍を必要としない、さらには③世界「政府」をも必要としない、ことを指摘している。

国家は構成員の自己組織化による上向きの因果性によって形成・維持されるが、この自己組織化は対内的には強制力のある規則、対外的には領域的閉鎖性といった境界条件によって構造化されている。このような意味で、自己組織的なシステムとして国家は、ローカルなレベルでの最終状態に到達しているといえるだろう。

しかしながら、国家は全体としては不均衡なシステムに属しているため、長期的には安定的ではないことから、この状態を解消するために世界国家が追求されるとウェントは論じる。その動因となるのは、マイクロレベルでの「承認をめぐる闘争 (struggle for recognition)」とマクロレベルでのアナーキーの文化の相互作用である。まず、承認をめぐる闘争は「個人および集団のアイデンティティを構成する」ものであり、究極的には観念的な次元に属するが、物質的競争によって媒介される (Wendt 2003, p. 507)。物質的競争は領域国家をめぐるおなじみのホブソンの正当化とも重なるもので、アナーキーは時間の経過とともにテクノロジーや戦争がより破壊的になる傾向を生み出すため、国家の望ましい規模については、つねに拡大圧力が存在する。だがウェントによれば、物質的な理論に欠けているのはアイデンティティの変化をめぐる視点だという。

この側面を補うために、ウェントは (フクヤマを介した) ヘーゲルの承認をめぐる闘争の議論を導入する。ここで、承認とは「差異について特定の意味づけを付与する社会行為である。他の行為主体 (「他者」) は自己との関係において、正当な社会的地位をもつ主体として構成される」と捉えられる (Wendt 2003, p. 511)。とくに相互承認は集合的アイデンティティを生み出すことから重視される。ウェントはヨーロッパの国家がお互いの主権を承認し合い、国家からなる社会のはじまり

となった1648年のウェストファリアの講和を例として挙げている。

なお、ウェントは他者の平等性を承認する対称的な承認と、自己の承認は確保しつつも他者の要求には応じない非対称的な承認を区別する。前者の方が安定性は高いが、不平等な政治秩序 (ウェントの言葉を借りれば「非ヘーゲル的なウェーバー型国家」からなる世界) は歴史的に長いこと存在していたことから、ここでは単に承認に対する欲求が安全保障と同等であると述べるにとどまっている。

このマイクロレベルにおける承認をめぐる闘争に対応して、世界国家形成のマクロレベルは5段階の承認の過程があるとウェントはいう。このうち、最初の4つの段階はそれぞれアナーキーの文化を形成し、各文化はシステムの部分 (すなわち国家) の相互作用を制約する境界条件を課す。システムの進歩を推進する原動力となるのは、暴力を通じた承認を求めることを可能とし、軍事テクノロジーの発展によりそのような暴力がますます耐えがなくなるような「アナーキーの論理」である。

第1段階の「国家からなるシステム (system of states)」は承認が完全に欠如した世界である。このホブソンのアナーキーの文化では承認がないためにシステムにおける集合的アイデンティティもまた存在せず、国家はお互いを「敵 (enemy)」として認識している。しかしながら、ウェントはこのような世界は著しく不安定であり、長期的には維持しえないという。

第2段階の「国家からなる社会 (society of states)」、あるいはロック的アナーキーの文化では、国家はお互いの法的主権は認めており、国家行動についても一定の制約を受け入れている。このことから、国家間にはある程度の連帯は存在しているが、集合的アイデンティティはいまだ浅く、限定的ながら戦争も認められているという。国家はお互いを「敵」としては構成していないが、「競争相手 (rival)」として認識している。

国家間の主権の承認だけでなく、非暴力的な紛争解決の必要性が境界条件に追加される、第3段階の「世界社会 (world society)」では、戦争とい

う差し迫った問題は普遍的・多層的な安全保障共同体によって解消される。相互承認の対象は国家だけでなく個人にも拡大しはじめ、より重層的な連帯が形成される。もっとも、この段階も武力行使に対する集団的な保護がないため、安定的な最終状態とはいえないとウェントは指摘する。

第4段階の「集団安全保障 (collective security)」において、システムはお互いを「友 (friend)」として構成するカント的アナーキーの文化に到達する。システムの境界条件には脅威に対してお互いの安全を保障することが追加され、とくに安全保障の面で集合的アイデンティティが発達する。しかしながら、領域国家の主権はいまだ健在で集団安全保障が効果的に機能するかは国家の同意に依存すること、また集団安全保障体制は国家とは異なりあくまで自発的であることから、世界国家が目指されることとなる。

第5段階の「世界国家 (world state)」に至ると国家主権はグローバルなレベルに移譲され、個人の承認ももはや国境によって媒介されなくなる。個人も国家もともに完全に承認された主体性を獲得するのである。世界国家が安定的な最終状態かどうかについて異論はあるものの、アナーキーとしての歴史は終わりを告げるとウェントは結論づける。

以上のウェントの議論について、紙幅の制約から全ての点に言及することはできないが、3点ほど論点を挙げたい。第1に、国際関係の展望を考察するにあたって目的論的説明を導入することの意味である。ウェントはアリストテレスの4原因論に立脚した目的論的説明を試みるが、国家を所与とし、目的因 (最終状態) として世界国家を想定することは既存の国際秩序のみならず、その来歴 (たとえば国際社会の拡大とそれともなう暴力的転換) についても正当化・自然化することにつながりはしまいか。目的論が結びついている古代の世界観が閉じた世界を想定しており、基本的には封建的な社会秩序に基づいていることを考えるとなおのことである (長尾 2015)。この懸念は、システムの歴史的進歩を概観するうえでヘーゲルが接ぎ木されることでより一層深まる。国際関係

論に埋め込まれたヨーロッパ中心主義的なウェストファリア史観に対するポスト西洋型の国際関係理論が構想され、ポスト・ヘーゲルの歴史が模索される今日にあって、〈権力／知〉をめぐる問題群への関心の薄さには理論的弊害も大きい (Shilliam 2011; 土佐 2012)。

第2の論点は、「承認の政治」や「アイデンティティの政治」を構造的変化の主要な推進力として想定することの含意である。もちろん、これらの問題が冷戦終結後の世界政治の大きなテーマとなっていることに異論はない (Agné 2013; Inayatullah and Blaney 2004)。しかしながら、相互承認の効果を「われわれ」ないし集合的アイデンティティの創出と論じる際に、はたしてウェントはいわゆる「文明の基準」によって「他者」の側に置かれ、いまなお置かれ続けている人びとが抱く不公平感や憤りをどこまで織り込んでいるのだろうか (Hobson 2014)。このことは、対テロ戦争の開始とともに「感情の政治」という問題系が前景化してきたことと併せて考えるとより鮮明となるだろう (Saurette 2006; Moisi 2009; Hutchison and Bleiker 2014)。

最後に、超国家権力が内包する脆弱性を考える際にウェントの世界国家論がもつ意義については、まさに超国家権力 (ウェントのいう世界国家) が成立する過程で生じるであろう参加の非対称性をどのように解消していくかという点が挙げられる。「文明の衝突」という言説が広く流布したのにはむろんその分かり易さもあるだろうが、なによりも歴史的にたまった澱のような感情がその背景にある。「承認の政治」と「感情の政治」との絡み合いを解きほぐさない限り、来たるべき超国家権力は今日のアポリアをそのまま内包してしまう危険性を有しているのではないだろうか。

参考文献

- 土佐弘之 2012『野生のデモクラシー—不正義に抗する政治について』青土社。
長尾伸一 2015『複数世界の思想史』名古屋大学出版会。

Agné, Hans 2013 "The Politics of International Recog-

- inition: Symposium Introduction,” *International Theory*, Vol. 5, No. 1, pp. 94–107.
- Hobson, John M. 2014 “The Twin Self-Delusions of IR: Why ‘Hierarchy’ and Not ‘Anarchy’ Is the Core Concept of IR,” *Millennium*, Vol. 42, No. 3, pp. 557–75.
- Hutchison, Emma, and Roland Bleiker 2014 “Theorizing Emotions in World Politics,” *International Theory*, Vol. 6, No. 3, pp. 491–514.
- Inayatullah, Naeem, and David L. Blaney 2004 *International Relations and the Problem of Difference*, Routledge.
- Moisi, Dominique 2009 *The Geopolitics of Emotion: How Cultures of Fear, Humiliation and Hope Are Reshaping the World*, Bodley Head.
- Sárváry, Katalin 2006 “No Place for Politics? Truth, Progress and the Neglected Role of Diplomacy in Wendt’s Theory of History,” in Stefano Guzzini and Anna Leander eds., *Constructivism and International Relations: Alexander Wendt and His Critics*, Routledge, pp. 160–80.
- Saurette, Paul 2006 “You Dissin Me? Humiliation and Post 9/11 Global Politics,” *Review of International Studies*, Vol. 32, No. 3, pp. 495–522.
- Shilliam, Robbie 2011 *International Relations and Non-Western Thought: Imperialism, Colonialism and Investigations of Global Modernity*, Routledge.
- Wendt, Alexander 1999 *Social Theory of International Politics*, Cambridge University Press.
- Wendt, Alexander 2003 “Why a World State Is Inevitable,” *European Journal of International Relations*, Vol. 9, No. 4, pp. 491–542.